人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)

山本理絵*1・藤井貴子*2

1．研究目的

人間関係に困難を抱える幼児に対する支援には様々な方法があるが、これまでどちらかというと個別的な支援の方法が研究されることが多かった。しかし、インクージョンの教育・保育においては、支援を必要とする対象児を集団に適応させるのではなく集団全体の関係性が問題になってくる。近年、周囲の友達・集団の変容に注目して分析する実践研究の重要性も指摘されている[1)]。

本研究では安心して自分が出せ、異質性や多様性を受け入れやすい特徴をもっている異年齢保育[2)]を通してどのような関係性が発展し、どのような援助方法が有効か保育実践の継続的観察及び保育者からの聞き取り調査の分析により明らかにする。

人間関係は、表面的な行為レベルだけで判断されるものではない。筆者は、異年齢保育においては、人間関係と密接に関連するものとしてとくに、①安心感を土台として、②他者の受容・承認、③援助・自己調整、④自尊感情が育っていくとの仮説をもっている[3)]。「安心感」とは、ⅰ.身体的・生理的な安全感、ⅱ.情緒的安定（脅威や恐怖を感じたりすることがない）、ⅲ.自己表出（自分の思いを緊張しすぎたり気取ったりしないで表現できる）、ⅳ.活動の見通しが持てる、ⅴ.所属感がある（自分を受け入れてくれる居場所がある、周囲の人から必要とされている）などを含んでいる。また、「自尊感情」は、ⅰ.何かが達成できて自分は有能であると感じる「自信」と、ⅱ.必ずしもできなくても自分には価値があると思え、弱さをもった自分をも肯定できる「自己肯定感」の2要素からとらえられる。そして、それらは、a.甘え－甘えられ・頼りにされる関係、b.憧れ－憧れられ、c.認めあう関係、d.教えてほしい－教えてあげる関係、e.要求しあい、鍛えあい、励ましあう関係などを結びながら相互に発達していくものと考えられる。

本稿では、どのような活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、大人との関係や上記のような子どもたちどうしの関係が発展し、①安心感、②他者の受容・承認、③援助・自己調整、④自尊感情が、どのように変化していくか検討したい。

2．研究方法

A保育園の異年齢クラス（3～5歳児20名）において月1回程度の観察及び保育者とのカンファレンスを約2年間継続的に行っており、その記録を分析する。観察は、午前9時半ごろから12時ごろまで、通常の保育の流れの中で参与観察を筆者2名で行った。カンファレンスは観察日の午後2時間程度、園長、幼児クラス主任、幼児クラス担任の10名程度で、注目している子どもについての1か月間の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。観察・カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し、内容を確認した。

記録の分析にあたっては、⑴対象児のモノや活動に対する関係（意欲、見通し、認識、期待など）、⑵対象児の友達との関係、の2側面から分析する。

なお、本研究の実施にあたっては、対象の保育園及び保護者には承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。

３．分析結果

３歳児年度途中で入園してきた女児Ｈを中心に変化を分析する。前述の観点からの子どもの変化には下線＿＿を、保育者の働きかけには〰を記した。

〈入園当初〉

Ｈは若干の発達の遅れがみられ、入園当初は落ち着きがなく、会話もオウム返しや一方通行で、周りの子どもたちと関わりをもとうとしなかった。最初はすごく泣いて、朝保護者ともなかなか離れられず、保育園に慣れなかった。年長児たちは、かわいい子として世話をしたがったが、Ｈは友達が来ると嫌がった。しかし、夏ごろからトイレトレーニングなどを通して保育者との関係ができてくると、周りから言葉を吸収していき、少しずつ話せるようになった。入園したときからお気に入りのおもちゃを持って安心していたが、3歳児の１月くらいからそれをロッカーに置いておいても大丈夫になる。Ｈは保育者との関係が深まるにつれ、年長児にかわいがられ、身の回りの世話をしてくれることも受け入れるようになった。子どもたちには、「Ｈが困っているときに手伝ってあげてね」と伝えていたが、世話をしたがる子が多く、次から次へとやってきて声をかけてくれた。ａ．甘え－甘えられる関係が集団の中にできていったといえる。

１期（４歳児４月～８月）　安心感をもって生活する

⑴　保育者との関係で達成感を共有する

Ｈは、活動の切り替えやホールなどへの移動のときに、泣いたりお気に入りのおもちゃをもって廊下で下を向いてくるくる回ったりぴょんぴょん跳んだりしていることが多かった。朝、母親とはなかなか別れられず、５月ごろから、母親に「行ってらっしゃい」と言って別れることができるようになった。朝の身支度を保育者が一つひとつ教え、Ｈが見通しをもってできたときに保育者とハイタッチをし、生活レベルでの達成感を共有すると、次第に保育者と目が合い言葉や笑顔が増えてきた。６月には、身支度が一人で行えることが増え、自分から保育者にハイタッチしてくるようにもなったが、言葉のキャッチボールは難しかった。Ｈは、静かな場所、部屋の隅を好んだ。粘土遊びは好きで、黙々と取り組み、へびなどができると、保育者に「みてみて」と訴えていた。

７月には、指の力が少しついてきて、小さい積木を自分から積むようになり、保育者がほめると、「でかい！」と言って自分で壊して、「またやればいいわ」と続けていた。

以上のように、ほんの少しでもできたことを、保育者が共感して体で表現してほめることで、できたことを実感し、自信（④ｉ）をもち保育者との信頼関係ができていった。

⑵　保育者を支えに友達と関わりをもつ

友達との会話は少なく、「ワレワレハ、ウチュウジンダ」「オバケダゾー」など、友達の真似をして同じ言葉を言って自分で遊んでいた。次第に、わらべうたなどの友達の輪の中に自ら入って、友達を模倣して楽しむようになった。友達と手をつないで回るような、好きなわらべうたには自分から参加できるようになった。慣れていないわらべうたのときは、輪からはずれて部屋の中をくるくる回っていた。屋上に移動して行うプールは最初は抵抗があったが、保育者が他児と遊んでいると入ってくるようになった。

友達を模倣してできそうな遊びでは友達と関わることができるようになったが、何をしてよいかわからないとき、好きな遊びが見つからないときは、うろうろするような姿がまだみられた。そこで、目標や完成がはっきりしていて達成感や自信をもちやすい遊びとして、簡単な型はめやパズルを意図的に用意し、その遊びに誘った。○や△□などの形の穴に合うものを入れて落とす遊びやパズルをしようとしていると、めずらしいおもちゃだということもあって、他児がやってきてやり方を教えてくれる。Ｈは自分ではなかなかできず、友達に教えてもらって向きを変えて入れることができると、「できた」と喜び、おとなとハイタッチをする。Ｈは周りの子どもたちから教えてもらう関係（ｄ）ができており、教えてくれる他者を受け入れている（②受容）。

〈エピソード１〉　７月17日

Ｈは、プールの中の隅でプールの水を手ですくって外に出していて、下の水たまりに跳ねるところを見て「はなび!!　はなび!!」と言っている。他児（５歳児）が、Ｈに関わって一緒に「はなび!!」と言って真似して喜んでやっている。

プールから１回あがった休憩中は、クラスみんなでわらべうたをして体を温めている。異年齢で二重の輪になって、内側と外側の２人組で向かい合ってジャンケンをし、外側が一人ずつずれて相手を交替していくわらべうた（「♪♪たけのこめーだした」）を行った。

Ｈは内側の輪に入って下を向いている。言葉はないが、前に来る友達が、歌ってくれるので手は出している。

休憩後、プールに入ったが、「寒い」と言っていたので同じく寒がっていた５歳児と二人で外に出て日光浴をしていた。そこに、同じ４歳児のＴがてんとう虫を持って観察者に見せに来る。

Ｈ「テントウムシ!!」

観察者２が「Ｔちゃん　Ｈちゃんに見せてあげて」と言うと、Ｔは見せてあげる。てんとう虫が弱っていたので、

Ｈ「わーい　テントウムシうごいてる　かわいそう」

Ｏが来てＴの持っていたてんとう虫を取ってしまう。

Ｔ「Ｏ、Ｔちゃんがみつけたんだよ」と何度も訴えるが、Ｔに背を向けて知らん顔をする。

Ｔ「Ｔちゃんが（持ってきたのに）……いじわる」と言いながら泣き出す。

Ｔ「Ｍ、ごめんはないの？」

Ｍ「ごめん」

Ｔ「いいよ」（目頭をぬぐう）

それを見ていたＨは「テントウムシ　泣いとる　ばーばー……」「テントウムシ　泣いとる　かわいそう」と言う。

その後、シャワーをしてクラスの部屋に戻ったが、Ｈはタオルなどをどう片付ければよいのかわからず迷っていた。年長児がタオルをくるくる巻いてたたんでしまうのを見て「くるくるまわすの？」と観察者に聞く。観察者がタオルを床に広げてあげると、Ｈもタオルをくるくる巻いて「できた！」と観察者に見せて、自分のロッカーに片付けに行った。

Ｈは直接友達に話しかけることはなかったが、友達がＨの真似をして共感したり、Ｈが友達の様子を見て、言葉を発している。また、年長児がやることを見て、次に自分がどうすればよいかわかり、真似してやって、できたことで自信（④ｉ）を持っている。

Ｈはクラス集団に自然と受け入れられており、友達の輪の中に入ることができ、友達の真似をし、大人や友達のリードで遊びに参加できている。異年齢で大きい子から優しくされ、また小さい子に優しくすることが、自然とできる子どもたちであるので、違和感はないと思われる。このような集団の雰囲気のなかで、わらべうたをしにホールに移動するときなども、周りの子どもたちが、Ｈにお気に入りのおもちゃを持っていくように声をかけてくれる。しかし、保育者が「○○（おもちゃ）はお留守番」と言うとそのままにしておいたり、「○○はおるすばんか～」と言ってしまって、活動に参加することができるようになった（７月）。また、８月の誕生会では、友達と一緒に前に出て、保育者の支えのもと、皆の前で名前、年齢、好きな食べ物を答えることができた。以上のことから、Ｈは自分を受容・承認してくれる集団の中で、心の杖が徐々にいらなくなって不安が減ってきているといえる。クラス集団において安心感、とくにｉ.身体的・生理的な安全感、ii.情緒的安定をもって過ごせるようになったと考えられる。

２期（４歳児９月～11月）　個人的遊びで自信をもち、友達と受動的に関わる

⑴　自分なりの目標をもち自分で達成しようとする

８月ごろからパズルで好んで遊ぶようになった。友達や保育者が教えてくれ、1か月ほどかかって９月に、８ピースのパズルを自分で完成することができると喜び、「も一回やる！」と繰り返していた。以後友達が一緒にやろうとすると「一人でやる」と主張するようになった。型はめは○や△はできるが、2や5の数字は入れるのが難しく、友達のアドバイスを受け入れてできた自信をもっていった。上中下３ピースの着せ替えねこのパズルは、にこにこ顔の部分が気に入って、友達に取られないように後ろを向く。しかし、友達に「かして」と言われると貸していた。

運動会の練習では、一つ終えるごとに保育者とハイタッチして満足感を得ている様子だった。写真を付けたプログラムを部屋に掲示しておき、見通しをもって取り組めるようにした。保育者が衣装を作っているのを見て、Ｈは自分のもあるのか保育者に聞き、作るのを手伝った。また、服の色を選ばせると「オレンジ」と自分で決め、自分で塗り絵をしたロゴを運動会の衣装に貼ったり、友達が衣装のサイズを合わせているのを見たりしており、嫌がらずに衣装を着ることができた。

〈エピソード２〉　11月30日

誕生会用にスタンプで手形を取っている時

保育士「ぺたぺたしているよ」

Ｈ「Ｈは？」

保育士「Ｈもやる？」

H「やるやる!!」

絵の具の色の種類があるので、Hは「あか」と選び、掌をパレットの中の絵の具につけて「1，2，3，4，5，6」と数え、その掌を紙の上において「1，2，3，4，5，6」と数え、押し終わると「かっこいいー」と言っていた。それを何度か繰り返していた。

以上のように、Hは自分なりの目標を持ち、自分で達成しようとし、次第に自分でできる自信をもち、気に入ったものは、自分が占有しようとする自己主張がみられたり、友達がやるのを見て自分もやりたいと主張してやろうとしたりするようになっていった。憧れ－憧れられる関係（b）も見られ、自己表出できる安心感（①ⅲ）も見られる。保育者は、活動についてはHに選ばせて決めさせるようにしていた。生活の部分でも自分でできることが増え、時間がかからずにできるようになってきた。片付けの切り替えも泣かずにできるようになってきた。

⑵　友達が楽しそうにやっているのを見たり支えられたりして活動に参加し自信もついてくる

運動会に向けては、Hは年長児と一緒に絵本の忍者のページを見たり、友達が衣装を着ているのを見て自分も着たくなったり、年長児の手裏剣投げを真似していた。運動会の並び順は、4，5歳児の友達に名前を呼んでもらい自分で場所まで行き、手をつないで待つことができた。Hは体を動かすことが好きなので、「今日も走った」「楽しかった」と言い、かけっこを楽しみにしていた。3歳児のときの運動会は練習もできず、本番も親のもとにいたが、練習、本番とも参加でき、異年齢チーム対抗の種目やかけっこを楽しんだ。

Hは友達により関心をもつようになり、憧れ―憧れられる関係（b）の中で友達のやっていることを見て参加の意欲が高まったと同時に、友達が一緒にいることで安心して競技に参加することができたと考えられる。

自由遊びでは、レゴの遊びにおとなが入って同年齢の子とつなぐことによって受動的な関わりができている。

〈エピソード３〉　10月23日

自由遊びの時間に４歳児だけが部屋で過ごしていて、Hは粘土で遊んでいる。

観察者２「Hちゃん　何作っているの？」

向かいに座って粘土遊びをしていた４歳のYが「これかい、さかな、ステーキ」

Hは、それを聞いて、「たまごつくった」と言う。

H「これ　たまごだよ　にわとりがはいっているたまご　たまごがかえるよー　うまれたよーほら　たまごだよ　にわとりのたまご！　にわとりのたまご！　うまれたよー　ママのところへおいでー」（たまごの中から生まれてきたと何回も言って嬉しそう。）

H「カアーカア、カア」

観察者２「からすになったの？」

H「うん」

保育者は周りの子どもたちに作ったものを尋ねたり「おいしそうだね」とやりとりをしている。

保育士「おかたづけするよー」

H「えー」

保育者「またやろうね」

H「うん」

何を作っているか尋ねられたことには、友達の言葉を聞いて答え、自分のイメージを言葉にしている。他児との会話はないが、並行的に自分なりに楽しんでおり、まだやりたい、次もやりたいという意欲を持つことができている。

〈エピソード４〉　10月30日

友達が自分の髪を結うゴムがないと訴えているので、Hも一緒に探す。「探そうよ」と観察者の手を引っ張って、探そうとする。みんなで片付けながら探している。レゴやカプラを集めて片付けながら探していた。

Hもクラスの一員として、困っている友達を助けようとしている。世話をしてもらう存在としてではなく、対等の立場で、援助（③）したい気持ちが芽生えている。

〈エピソード５〉　11月30日　10時頃から

歯ブラシが置いてある所で、「これ何（と書いてある）？」と観察者に聞き、歯ブラシに書かれた名前を読んでもらって、一つひとつ、友達を確かめている。

５歳児たちは、劇遊びに使う衣装を作っているので、その間Hが観察者１と床に座ってレゴブロック２本でロボットの足を作っていると、Sが来て「何つくってるの？　ブロックまだいっぱいあるよ」と言う。同じ４歳のT、Kもやってきてブロックを Hに渡

してあげる。
H「おうちつくる」と言って高く積み上げている。
S「これてっぺんにつけようか」
H「大きいおうちつくろうよ」
SとKが、「こわしたね」「ちがうわー」とふざけながらやりとりしていると、Sが笑うので、
K「どこがおもしろいんだよー」
H「なにわらっているんだよー」
観察者1「Hちゃん　おうちつくりたいの？」
H「うん」
H「ケーキ」
S「おんなのこ（ケーキ）すきだよー」
H「ケーキ　ケーキだよー」
K「(Hに）キスしてもいい？」
H「ヤダー」
K「(Hに）ハグしてもいい？」
H「れいぞうこつくろ」
観察者1「冷蔵庫の中に何入っているの？」
H「カスタード、シュークリーム、マシュマロ、シュークリームのなかにはいっているの」
観察者1「K君　Hちゃん冷蔵庫つくりたいんだって」
K「Kくんに　まかせて」
K「Hちゃん冷蔵庫のかんせい」
H「はちみつ　つくろー」
K「はちみつの入っているシュークリーム　むずかしいなー　Kくんに　まかせて」
H「ケーキ　つくろう　まかせてー」

Kが、少し離れたところでブロックを２段重ねて作って持ってきて「ケーキできた」とHに渡す。
H「ケーキかざろう、はちみつ、いちご、」
T「こんど、何つくる？」
H「さかなつくろう」
K「さかなだよー」とブロックを重ねて積む。
H「バナナのほうにかざってみよう」
H「バラ　チョウチョ　さいごにりんご　あかいりんごつけて　バナナクリームもかざってみよう」
H「ねえ　バナナクリームつくって！」「マシュマロつくったよ」「これがマシュマロね」
H「あかいマシュマロ」
観察者２「手に持っているの（ブロック）なあに？」
H「クリーム」
H「さいごにサクランボのせて　ベリーのっけたよ」
いろいろなものを載せたあと、手に持っているブロックでクリームをふりかけるまねをしている。
Hは「さいごにバナナをのっけて」と言っていると、Kが「ハッピーバースディー」と言いながら長いブロックを７本持ってきて、「やきそば」と言っている。
観察者１「やきそばだージュージュージュー」
H「においかいだ」
観察者１「どんな臭いした？」
H「ケーキのにおいがした」
H「マシュマロもはいってんだもー」
K「やきそば　かんせい」
H「ケーキつくる」
H「いちご、ぶどう、おいも、おいものっけたよー」
H「クリームのイモ、ほかほかのイモ、あっちちだからさわらないでね」
観察者１「あっち、ち」
H「あっち」
K「やきそばできたよ」
観察者１「あっちっち　これもあついよ　Hちゃん　やきそばもたべて」
H「あのさー　のりつけよー」
観察者１「やきそばにのりつけるの？」
H「うん」
観察者１　刻みのりを「パラパラ」と言いながらかける。
K「はし　スプーン　フォークあるよ」とブロックを持ってくる。
H「あっち　まだあついかも」
K「これでんわ　もしもし」と、やきそばとして持ってきたブロックを耳にあててそのつもりになっている。
Hは　ケーキにクリームを何度もかけている。
Kが作っていたやきそばで、観察者１が「あついのあついの　なくなれー　フーフーフー」と吹くと、Hも観察者と交互に吹く。
K「やきそばからいよ　からしがついている」
K「これからくないよー」
H「ケーキの特製だよー、メチャクチャだー」
K「あまーい」
観察者１「食べてみよー　あまい！」
H「クリームがあまい」
観察者２「どんな味？」
H「クリームたっぷり」
保育士が「ご飯食べようか　片付けるよー」と言うと

Ｈは手に持っていたクリームのブロックを崩す。
観察者１「Ｈちゃん　片付けるのじょうずだね」
その後Ｈは、部屋に落ちているブロックを拾ってブロックを片付けるケースに入れていた。

前日にクッキングでスイートポテトを作ったことが影響しているのか、1時間近くもこのようなやりとりを楽しんでいた。Hは、歯ブラシの事例に見られるように、友達により関心を持つようになっている。また、どこまでイメージを持てているのか、曖昧なところもあるが、最初に作るものを宣言してから作ったり、他児にも呼びかけたり、〇〇作って、と要求したりすることができている。そして、Hが作りたいものを大人が他児に知らせることによって、他児がそれを作ってあげようとしたり、「まかせといて」の言葉をHが真似したりして関わりが生まれている。また、やきそばを作った他児が持ってきても、自分の作っているケーキに関心が向いていたが、大人がやきそばを食べるように勧めることによって、やきそばを食べようとしたり、自分の作ったケーキを友達が食べようとしたりして友達との交流が生まれている。他児もHとの関わりを楽しんでいる。このように、この段階では、大人がHと他児をつなげる役割をすることによって、他児と関わることができている。

また、Hはわらべうたの「おてぶしこぶし」が好きで、同年齢の子と手をつないで輪になって参加している。Hがやりたいと言い出して、握って渡す石（ブロック）をHから回し始めることもあった。「からすかずのこかっぱのこ」はじっと見ていたが、5歳児が呼んでくれて3人組のオニができ、一緒にやっていた。

Hのことが好きな5歳児が追いかけてきて、キャーといって喜ぶ姿も見られた。自分の思いを言葉で伝えることができることが増えたが、他児の関わり方が嫌なときに「やめて」と言えず、保育者の援助で言えていた。

このころ、遊戯室に泣いて入れないことや、下を見て同じ場所をくるくる回ることは減ってきた。回るときも、周りを見ながら回るようになった。「何する？」と聞くと「歩いてる」などと答えていた。

以上のことから、Hは、拒否の表現をするときに保育者の援助を必要とするものの、自分のやりたいことを友達から認められ、教えてもらう関係（ｃ，ｄ）の中で、所属感（①ｖ）も持ち始めていると考えられる。

３期（４歳児12月～３月）　小集団での遊びに能動的に参加し、役割交替して楽しむ

⑴　やりたくない活動のときは「やらない」と言えるとともに見通しもできてくる

12月のクリスマス会の練習期間は前年度と違って抵抗はなく、自分でビニールの上に色テープを切って貼って作った衣装の着替えなどもやっていた。クリスマス会当日も両親と別れることができ、参加できた。しかし、クリスマス会の劇の練習の前後やクリスマス会が終了してしばらくは、Hはくるくる保育室や遊戯室をリズムをつけて動き回ることが増えた。以前は「お絵かきしよー」とよく言っていたがなくなってきた。少し緊張する活動の後でほっとしているとも考えられる。そのようなときにパズルや描画の活動に誘っても「あとで」「今は歩いているの」「今はやらない」と言えるようになってきた。跳んで歩く距離も長くなり、保育室全体を友達が座っていないスペースを動くようになった。跳んで歩くのを「スケートみたい」と意味づけてあげると喜んでいた。保育者の提案した制作を見せたり、「じゃ　（時計の針が）6になったらやろうね」と言ったりすると取り組む時もあった。トイレに誘うなどすると、気分が変わるきっかけになってやれる時もあった。また、やることがなさそうにうろうろしているときは、保育者が、教材などを他のクラスの保育者へ持って行ってもらうなどのお遣いを頼むと、一人で持って行って帰ってくることができた。

〈エピソード６〉　12月21日　10時すぎ

Ｈは身体測定の後、ぴょんぴょん跳びながらずっと部屋をぐるぐる回っている。保育者が「Ｈちゃん　これやろうか」と壁面のパーツを見せるとその気になった。クレヨンを出しに道具箱に行き持ってくる。

保育者が「次に何する？」と聞くと、Ｈはイスを探して廊下の方へ行く。次に、Ｈはのりを持ってきて一点をのりづけしているが、のばすことがまだ上手ではない。手についたのりが気になっている。ひっくり返して貼りつけるのは保育者が手伝い（やり方が分からない様子）、手を洗いに行く。Ｈはまた戻ってきて、クレヨンで「くもかく　おひさまー」と言って描くのを終えた。

その後、また大股で１歩，２歩，３歩と動きながら３歩目のところで屈伸して、「ジージージー」と言い

ながら動く。保育者１が「Ｈちゃん、○ちゃん（３歳児）とお絵かきする？」と聞くが、Ｈは無言で通り過ぎていく。
保育者１が「Ｈちゃん　何して遊ぶ？」ともう一度聞いても、Ｈは首を振っている。
観察者２「Ｈちゃん何しているの？」
Ｈ「ブーブーブー」
観察者２「ぶた？」
Ｈ「うん　うん」
保育者２「Ｈ、Ｈこれは？　みてー」と言うが、Ｈは「うん」と言って行ってしまう。
４歳児Ｓが「かっぱの輪」と言ってチェーンリングをＨの頭にのせてくる。Ｈはニコニコして喜んでいる。

Ｈは、安心して、自分のやりたくないことや、やりたいことを自己表出（①ⅲ）している。２月には、片付けを促されると、「だってこれＨのでないもん」などと理由を言って拒否するようにもなった。

また、年長児の体験を聴き、自分も「キャンプ行く」「芋堀り行く」と口にするようになり、経験したことや聞いたことをもとに“こうしたい”という願望的見通しやイメージが持てるようになっている（１月）。年長児に憧れ（ｂ）、先の見通し（①ⅳ）が持てるようになってきた。

自由遊びでは、他児が遊んでいる「らＱ」（小さいブロックのような玩具）は、Ｈは長い時間はやらない。らＱは力がいるので、指先の力が弱いＨはあまり好んでいない。１月ごろから、文字に興味が出てきて、「ひらがなのべんきょう」とよく言っていた。

〈エピソード７〉　１月25日

保育者１に絵本を読んでもらった後、Ｈは部屋の中で遊び始めた。他児はカプラや描画をして遊んでいる。
Ｈ「あとでひらがなのべんきょうする」
Ｈは「ひらがなしよー」と言いクーピーを持ってきて机に置く。イスを取りに行って絵本を読んでいる子どもの横に座って、「Ｈって書いて」と観察者に要求する。

Ｈは椅子を片付けてから、扉の壁に貼ってある歌詞を指さして、「これなんてかいてある？」と質問する。
観察者２「うたのことば」
Ｈ「これはなんてかいてある？」（廊下に掲示している献立を指して）
観察者２「こんだて」
Ｈ「これはなんですか？」
観察者２「しか」
Ｈ「ちかてつって言って」
観察者２「ちかてつ」
Ｈ「ぴーぽーって言って」
観察者２「ぴーぽーぴーぽー」

途中、積み木を持ってきて少し遊んだ後、またあいうえお表（１文字ずつに絵がついている）を見ながら、
Ｈ「（これ）なんだろうって言って」
観察者２「かなづち？」
Ｈ「こんどはでんわー、もしもしーこれはでんわーこんどはどらやき、とにてんてん、ばびぶべぼ、ぱぴぷぺぽ、えーこれでいっぱいって言ってー、むずかしいな～　いちご、いちごたべたいなー、ピンポーンて言って」
Ｈ「それじゃ、クイズだして」
観察者２「この字何？」
Ｈ「これはし、しねい、ますく、まくら、たんす、ぜんぶのしっぽ、くるま、へまおもちゃのことだよ」
Ｈ「車のく、くるまいすのく、こおり、ぜんざい、つめたいのママとたべた（ぜんざいのこと）」
Ｈ「終わりはドッチーこっちだよー」（そばにあるダンボールを指さして言う。）

その後、チェーンリングを出してきた。リングをつなごうと頑張ってやるができない。観察者がつないだリングを手のひらに持って「うずまきだよー」と言っている。そのうち床に置いて「ロールケーキになっちゃいました」と言う。

このようにＨは、大人に質問を出すように要求したり、○○と言うように要求している。また、このころ、昼休憩の保育者と別れるときも、また戻ってくることがわかって見通し（①ⅳ）ができ、「あとでね」と別れられるようになった。

⑵　みんながやっている遊びに自分から入ってきて役割を交代して楽しめる

クリスマス会の劇の練習中は、年長児に手をひかれて前方に出てきて、なんとなく口を動かしている状態だったが、練習を繰り返すにつれて、友達と声をそろえてせりふ（「キャー、たすけてください」）を言えるようになった。歌はいつの間にか覚えていて、楽しそ

うに歌っていた。練習前後などに、部屋でくるくる歩き回っているときに友達にぶつかると、友達がじゃんけんしてくれたり、抱きつかれたりして喜んでいた。じゃんけんは、後出しで同じものを出して「勝った！」と言っていた。また、散歩では保育者とではなく、同年齢の友達と手をつないで行くことができた。

12月に、4，5歳児がカルタを並べていると、Hもイスを持ってきて「Hもやる」と言って入ってくる。読まれたカルタを「ハーイ」と言って取った時、「トッター」と言っている。みんなが取れたカードを、Hに渡してくれるので「こんなに取れた。1，2，3，4……」と数えて喜んでいた。

〈エピソード８〉　２月19日

保育士がカルタを持ってきて、Hをカルタに誘うと、自分で椅子を持ってきて、「Hがやる」と読み手になりたがる。5，6人集まり、Sも読もうとしていたので、

観察者１「Sちゃん　Hちゃんが読みたいって言っているけどどうする？」

Sが「いいよ」と言うので、読み札を半分に分けてHと交互に読むことにする。

H「すいすい」

S「すー」（Hが読み終わらないうちに）S「ハーイ」

H「ろうそく６ぽん　６さいです」（ゆっくり読む）

S「とった！」

H「にこにこ　にっこり　にんきもの」

H「るーん　るーん　るすです……」

子どもたち「もうとったよ」

観察者１「でも　Hちゃん読みたいんだって」

Hはたくさん読んだあと、取り手になり、少し取るとやめて、また部屋をうろうろする。

この時期、Hの要求に周りの子どもたちが譲ってくれることが多く、Hもそれに慣れてしまっているようであったので、保育者は「かして」と言わせるようにしていた。エピソード７では、自分のやりたい役を友達の中で主張し（①iii）、大人の仲介によって他児と役割を調整（④）し、活動に参加することができている。

また、保育者がHとおにごっこを意図的にするようにすると、他の子どもたちも入ってきて、おにごっこでコになったりオニになったり役割交代をして楽しむようになった。12月はキャーと言って走り回っていたが、1月には振り返りながら逃げたり、友達にタッチするようにもなった。5歳児は真剣に走ってくれるので、スリルがあって楽しそうにしていた。職場体験に来ていた中学生を友達と取り合ったり、友達との間でもやりたいことや役を自己主張するようになる。病院ごっこにも入ってきて、患者役を喜んでやっていた。散歩先では2歳児に近寄って「お名前は？」「かわいいね」と言ったりしており、他児を受け入れようとする姿（②受容・承認）が見られるようになってきた。

〈エピソード９〉　２月19日

２月の２週間くらいは、作品展の絵に取り組むので、４歳児だけで過ごしている。朝の集まりでの絵本の読み聞かせの後、絵本にちなんで乗り物に乗った自分の顔を描くことになり、電車、気球など描きたいもの別に３人ずつほどで１枚の紙に一緒に描き始める。Hも絵本には集中していて、「Hも描く？」「H描く」とやる気になっていたが、みんなが描き始めると、部屋の中をピョンピョン跳んで歩く。保育者が「Hちゃん描く？」と尋ねても「あとでやる」と答える。

保育者は電車の絵を描きたいM児とT児の間にHが描けるようにスペースをあけている。保育者が「Hちゃん、Mちゃんが描けるようにしてくれたよ」と声をかけても答えずに跳んで回っている。そのうち自分の好きな絵本を観察者に持ってきて膝の上にのって読んでもらう。MがHに「電車、何色がいい？」と尋ねると、「青」と答える。保育者に「Tも青でいい？」と聞かれてT「うん」。

H「ねんど　みどりぽいがー。きいろ。これしんかんせん。かみにかいてある　おさかなさん」

Hは絵本の文字を指さして、「がったん　がたがたーどっしん」、「しんかんせん　これがとれた　へんしんした」、「これが　とろっこでんしゃ」、「ぶつからないように　くろにしんかんせん　ごめんね　めがまわった　めがまわってるー」などとしゃべっている。

観察者１は、ときどき相づちをうちながら、「Hちゃん　青の電車がいいと言ったでしょう？」と描画に誘おうとするが、Hは絵本の字を読むのに夢中で答えない。

そのうちに（エピソード８のカルタの後）、S、K、TがHのところに来て、観察者１の膝を取り合ったり、たたかいごっこのようになったり、Hに抱きついてじゃれあって遊ぶ。

ＳとＫ「バババババー。Ｈがいちばん強い」
Ｓ「Ｈちゃんー」
Ｋ「ぼくがいちばん強い」
Ｈ「Ｈはさー、強いのー、はなして」
Ｋ「Ｈちゃん、Ｈちゃんー」
Ｈ「Ｈは女の子だからいちばん強いんだよ」
Ｈ「やだってばー、Ｈがいちばん強いの、はなしてよー」

この後、保育者はＨに、描画を「時計の針が３になったらやる？」と聞くが、「あとで」と答える。「４になったらやる？」と聞かれても、Ｈは「（あいうえお表を）読んで」と返していた。Ｈは自分のやりたい遊びをして満足したのか、みんなが描き終わる頃ようやく描き始め、集中して描いていた。他児たちは、給食の準備が終わり、Ｈが描き終わるのをせかさずに待っていた。

Ｈは絵本をじっくり楽しんでから、友達が描き終わってからのほうが安心して取り組めるようである。周りの子どもたちは、Ｈも仲間の一員として描くスペースをあけておいたり、何色で描くか聞いたり、描き終わるまで待っていてあげている。また遊びの中ではあるが、Ｈは自分が強いことを主張し、周りの子どもたちはＨが弱い存在ではなく強いということを認めていたり、Ｈのやりたいことや役を許容している。相互に認め合える関係（c）ができている。

〈エピソード10〉　３月８日

Ｈは粘土を持ってきて同じ４歳児のＫ、Ｎの隣に座って、Ｎに粘土用のハサミがほしいと言っている。Ｋは、粘土でジャングルを作っている。
Ｈ「じゃんぐるのおかしは？」
保育士「これなに？」
Ｈ「だんごだよ、ジャングルのおかし」
Ｋ「みてみて、これおみせ。おかしとおにんぎょう、ここにやしの木がある」

保育士はＫの作ったへび、葉っぱ、はりねずみなどについてやりとりをしている間、そばでＨは自分の作っただんごを見ている。
Ｈ「だんご　チーズはいっている。ようこそじゃんぐるのおかしへ」
Ｋ「とり肉を　かぶったかめ」
Ｈ「きゃべつ、わかめ、しょうゆ」
Ｋ「Ｋに　（Ｈが作ったもだんごを）ちょうだい」
Ｋ「Ｈ！　Ｋすき？」
Ｈ「すき　じゃんぐるのおかし　ようこそ」
Ｈ「10えん、おだんごまるくないと　くるくる」
Ｈ「ハーイ　10えんちょうだい」とＫとだんごを交換する。
Ｈ「たまごがはいっている　チョコにはいっているの」
保育士「たまごが？」
Ｈ「……」
Ｋはおしゃべりしながら粘土遊びをずっと楽しんでいた。Ｈは自分で粘土を「くるくるへび」と見立てていた。

Ｈは、粘土用のはさみを譲ってくれるように友達に頼んだり、友達の作っているおだんごを見て、10円で交換しようと自分から声をかけたりして直接やりとりしている。また、自分のこと好き？ と聞いてくる男児もおり、周りの子どもたちは、Ｈと対等に好かれたいと思っており、Ｈは周りの友達に受容され、認められている（c）ことがわかる。

以上のように、Ｈは次第に友達の遊びに自分から入り、理解が進むとともにより魅力的な役を主張したり、おとなを介さずに直接やりとり、交渉ができるようになっていっている。

４期（５歳児４月～８月）　大きくなった意識とともに苦手意識も出てくる

⑴　制作などは保育者と１対１でやりたがる

保育者が設定した制作などは、みんなと一緒にやらずに、みんなが終わった後に保育者と１対１でゆっくりとやることが多くなる。やりたい遊びがないと周りをぴょんぴょん跳んで回る。

毎朝、各自のおたより帳のカレンダーのその日の箇所にシールを自分で貼ることになっているが、Ｈは貼る場所の日の数字を示してあげないと、前日貼ったところの次の所に貼ればよいということがわからない。毎週１日療育に行って文字の練習をやっているとのことだが、鉛筆をうまく持てず筆圧が弱く、まだ文字を書くのは難しく、手を添えたり、線をなっぞたりしている。

そのような状況なので、制作などは、ある程度みんなが終わった後保育者と１対１でゆっくりとやることになっていると自分でも思っているようで、みんなと一緒ではやらない。自分がうまくできないことも意識

してきていると思われる。1対1でやり方を丁寧に教える場面も必要だっと考えられる。

⑵　年長児になった意識をもち3歳児を気に掛ける

同年齢の友達からお世話されるのを嫌がるようになってきた。より小さい友達に眼が向くようにと、7月に食事などを一緒にする異年齢の小グループをつくると、同じグループの年少児をより気に掛けるようになった。食事中も「Uは？」とやることが遅い子を気にしていた。Uも、呼んでもらえることによって、なかなか席につかないということがなくなっていった。

グループでそろったら一緒に「いただきます」をして食べるのだが、その挨拶をみんな楽しんでいた。一方で、3歳に「H、おいでー」とごっこ遊びなどに誘われて喜んで行っていた。

同年齢の5歳児の友達は、小さいレゴやカプラ、らQなど、難しい遊びを好むようになり、Hが一緒に遊ぶことが少なくなった。しかし、同年齢の友達が単純な遊びをしていておもしろそうだと、近づいていって一緒に楽しむことはあった。

この時期は、年少児を気に掛け呼んだりすることによって教えてあげる（d）という関係ができ、頼られることもあり、自分の役割を意識し所属感（①ⅴ）をもっていたと考えられる。年少児はそのようなHを慕って一緒に遊んでおり、Hは年少児からみて甘えられたり、憧れる存在であったといえる。

５期（５歳児９月～３月）　好きな遊びが広がり、集団の中で見通しをもって活動に取り組もうとする

⑴　好きな遊びが広がるとともに、保育者の気持ちを察しながら主張する

Hは、やることがなくなったときや次の活動に移るとき、片付けた後などにぴょんぴょん跳んで回ることはあったが、少しずつ自分から好きな遊びを始めることができ、集団での活動も見通しをもって参加することができるようになってきた。異年齢保育の中では、3，4歳児がよく遊ぶような簡単な玩具も用意している。Hは、大きいブロック（アイリンゴ）が好きで、出ているブロックに興味を示して遊んだり、「きのうの続きしていい？」と自分から出そうとしたりして、遊び始めるようになった。また、虫が好きで、図鑑・絵本をよく見るようになり、キャンプにも虫をテーマにした活動を取り入れることで、興味をもって参加できた。9月には芋堀りや運動会の描画で、顔だけでなく体、手、足がついた絵を描くようになった。Hは興味にそった継続的な活動ができるようになった。Hが興味を持てるものを集団の活動に取り入れたことが効果的であった。

Hは身体を動かすのが好きで、逆上がり、跳び箱、縄跳びなど難しいが、次に何をすればよいかわかって自分からやろうとした。「できない」と言いながら、保育者が横で教えると嬉しそうにしていた。

はさみの使用も上達し、制作にも積極的になってきた。作品展の時は少し難しいこともあったが、厚紙をはさみで切ったり、顔のパーツの形を自分で決めて切るのを保育者が1対1で、「目はどんなふうにする？」と聞くと一個ずつ考えながら作っていった。その後も保育者や友達が横について見守っていると、椅子に座ってワークブックの線をなぞったりシールを貼ったりする活動を長時間行うようになった。どうすればできるようになるのかという見通し（①ⅳ）がより持てるようになるとともに、今できていなくても恥ずかしいことではなく、頑張って挑戦しようという自己肯定感（④ⅱ）も育ってきていると考えられる。

一方で、トイレに行きたいときなど、保育者に「～～していい？」ときくことが多くなった。これは、一方的に主張するのではなく、相手の気持ちを考えようとするとともに、「いいよ」と言ってもらい、パターン化されたやりとりをすることによって安心しているのではないかと考えられる。

⑵　５歳児としての自覚がでてくる－集団の中での自分の役割やルールがわかり、それを実行しようとする

年長児キャンプ、運動会、劇を楽しみ、ちぎり絵などの制作のときも同年齢の友達の中に入って一緒にすることが増えた。運動会の練習などでペアになるときは、自分から3歳児を探しに行く姿も見られた。

異年齢でつくるクリスマス会の劇では、Hは出番ではないときにふらふらと舞台に出てくることがあった。同じ役の5歳児も自分が精いっぱいで手をつないで出てくるのを忘れたり、3人で一緒のせりふを言うとき、他児が先走って言ったりしてうまく言えなかったりした。劇の練習に誘うと「今はイヤ」と言うこともあったので、思いを受けとめることもあった。4歳のときは本当に嫌ではないが反応をみるためにイヤということがあったが、この時期は自分にできそうにない、難しい、でもうまくやりたいと思って嫌だと言っているように思われた。Hは、自分できちんとせりふを言いたいと思っている様子であったため、3人で長

いせりふを揃えて言うのではなく、H一人で言う短いせりふをつくった。ピアノの後にせりふを言うように伝えると、いつ、どこで言うのかわかっていて言えるようになった。ピアノも簡単な曲だったので、遊んでいる時も普通に口ずさんでリズムをとっていた。踊りは年長向けの難しいリズムなので、少しずれてしまうがHなりに楽しんでいた。

このように、周りが見えてきて、自分も役割を果たそうとするが、できそうにないとしり込みしてしまうことがあった。しかし、それも保育者が受けとめることで安心して自分の気持ちを主張でき、わかりやすく伝えることによって見通しをもって自己調整し（④）活動に参加することができ、所属感（①ｖ）をもつことができるようになっている。

自由遊びの時間には、他の子が遊んでいる細かいブロック（らQなど）の遊びに入っていくことは難しいが、自分で作ったものが「なんかわからん」と言いながら、それを持って同年齢の友達とたたかいごっこをするなどして関わろうとするようになった。

1月以降、3歳児は自分たちで遊べるようになり、Hは同年齢の子についていこうという意識があり、移動するときに、自分が置いて行かれると思って泣いてしまったこともある。就学を前にして少し不安も出てきたのか、園からの帰り道、門を出たらお気に入りのおもちゃを離さない様子がみられるようになった。

年明けにホールで大型カルタとりをしたが、最初の一文字と絵があるカードを床に広げていて「走って取りに行くんだよ」と話すと、Hは聞いていて、カードを自分で見つけて、意外と早いうちに取りに行くことができた。一人1枚とれたら、次は取らないというルールもわかって守れていた。

〈エピソード11〉　3月17日

「昨日友達と喧嘩したから　保育園には行かない」と欠席した。保護者によれば「Sちゃんとケンカしたと言っていて、雪が降ったから見たかったけど、Sちゃんがいたから見えなかったと言うのがきっかけだと本人は言っている」とのことだった。

翌日、Hが登園すると、他の子たちは気にしていないので「Hちゃんおいでー」と言っている。しかし、本人の中でちょっと気にして行こうとしなかったので、担任が「けんかしたの？」「でもさー保育園に来て仲直りしたいって待っていたよ」と言うと、すんなり遊びに入った。

本当に喧嘩が原因なのか、他に不安なことがあったのかはよくわからないが、このように、保育園に行きたくないという意識をもち、その理由をHなりに大人に説明でき自己調整（④）できたことに、Hの成長を感じる。

また、「かくれんぼ」で初めてオニをやった時、みんなが隠れていてHが、オニになり、かくれんぼしていることを知らなかった保育者に、「ねえ　Sちゃんどこにいる？」ときいて、居るところを教えてもらった。わからないときは尋ねる、助けを求めることができるということは、一定の自己肯定感のうえに成り立っていると考えられられる。

卒園式の練習も少しフラフラすることはあったが、部屋から出ていくことはなくリラックスして、踊りも楽しそうにやっていた。この頃いろいろなことがじっくりできるようになってきた。

4．総合考察

以上見てきたように、Hは、保育者や集団で受け入れられ、安心感とできた達成感・自信をもち、次第に集団の中でも年長児の姿に憧れたり模倣したりしながら活動意欲が高まり自己主張もするようになっていった。友達との関わりも、友達からや保育者を介しての受け身的な関わりから、自分からの能動的な関わりになり、年少の友達を援助しようとしたり、役割交代をしたり集団のなかでの役割を意識して果たそうとするようになっていった。

異年齢のクラス集団では、周りの子どもたちも自分たちがされてきたようにHを自然に受容しており、甘えー甘えられる関係、憧れー憧れられる関係、認め合う関係、教えてほしいー教えてあげる関係の中で、Hも他を受容・承認し、友達を援助しようとしたり、自己主張と周りの要求とを自己調整しようとしたりするようになった。また、Hも年長になるころからは年少の子をかわいがったり気に掛けたりするようになり、甘えられたり、憧れられ、慕われる側になっていき、5歳児としての自覚も育っていった。このように友達に受け入れられ、慕われるような経験は、自分の存在価値を感じ、Hの自己肯定感を培っていったと考えられる。

異年齢保育においては、年長児等のやっていることが見えやすく、見通しをもちやすく、模倣しやすくし、年長児に支えられて安心感をもって意欲的に活動に取り組めるように援助することが達成感や自信、自

己調整につながると考えられる。難しい遊びには参加しなかったりしり込みしたりする時期もあったが、どのようにすればできるかわかり、一緒に支えてくれる人がいると難しくても取り組もうとし、自己肯定感にもつながることが示唆された。保育実践においては「自信がない子どもはどの子ども？」という発想よりも、「その子どもはどういうときに自信がなくて、どういうときに自信がもてるのか」と考えることの重要性が指摘されているように、この視点からの分析が必要である[4)]。

このような人間関係に困難を抱える子どもの発達にとって、活動内容としては、きまった歌と振りで模倣しやすく友達との関わりをつくりやすいわらべうたが効果的であった。また、興味がもて達成感がもてる活動や玩具（型はめ、パズル、粘土、ブロック）を用意し、保育者が個別に関わったり、小グループで生活したりする中で、H は自信をもち、好きな遊びや友達への関心が広がり、見通しをもって活動に取り組もうとするようになった。その他の保育者の働きかけとしては、できたことを実感できるようにほめたり、見て真似したり自分もやってみたいと思えるようになる環境を設定すること、活動内容や方法をわかりやすく伝え、保育者がやってみせたり一緒に行うことも重要だということが示唆された。また、Hがくるくる回ったり、ぴょんぴょん跳んだりすることも、保育者は否定的に見るのではなく、その裏にある不安や迷いや自己主張などに共感し、その時期に応じた声のかけ方を探っていっている。そのことがHにとってよかっただけではなく、集団にとっても受容的な関係の形成につながったと考えられる。

5歳児になってからは、Hが好む遊びと同学年の友達が熱中する遊びが異なってきて、小学校入学を前にして、自分の居場所にやや不安を感じるようなこともみられ、個別の援助が必要であったが、この時期の支援方法についてはさらに検討が求められる。他のケースの実践分析も進め、検討を深めていきたい。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部教授　*2 日本福祉大学非常勤講師

1）浜谷直人他「特別支援対象児が在籍するクラスがインクルーシブになる過程―排除する子どもと集団の変容に着目して―」『保育学研究』第51巻第3号　2013年　参照。
2）山本理絵「異年齢保育の魅力」林若子・山本理絵編著『異年齢保育の実践と計画』ひとなる書房　2011年　pp. 36–40
3）山本理絵「異年齢保育で大切にしたいこと」『ちいさいなかま』No. 564　2011年9月号　pp. 32–37
4）浜谷直人編著『仲間とともに自己肯定感が育つ保育』かもがわ出版　2013年　p. 145

付記：本研究は科学研究費（2012～2015年度　基盤研究(c)　課題番号2453104　山本理絵研究代表）の助成による。